和文要旨

本論文では、フィンランド語の不定詞の動詞性（定形動詞の特徴を保持する度合い）および従属度（上位節に従属する度合い）について明らかにすることを目的とし、不定詞の使用実態を調査した。本研究で考察した不定詞は 9 形式（A 不定詞基本形、A 不定詞変格形、E 不定詞内格形、E 不定詞具格形、MA 不定詞内格形、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、MA 不定詞接格形、MA 不定詞欠格形）である。

本論文では、書き言葉コーパスのデータに基づき、不定詞の使用実態、不定詞の生産性、不定詞の動詞性、不定詞の従属度という 4 つの観点から分析と考察を行った。フィンランド語の非定形動詞に関する研究としては、Koskinen (1998), Ylikoski (2003) などがあるが、多くは生成文法の理論を用いた構文分析であり、コーパスを用いた数量的な研究は少ない。さらに、不定詞の生産性、動詞性、従属度といった観点からは、ほとんど研究されてこなかった。

まず、それぞれの不定詞の使用実態についてまとめる。A 不定詞基本形は、様々な要素と結び付きうる不定詞である。筆者は、A 不定詞基本形の文法機能を主語、目的語、述語、修飾語の 4 つに分け、いずれにも含まれない例を独立要素とした。A 不定詞基本形は、上位動詞と構文を形成する頻度が高かった。一方、名詞的な機能を持つ場合があることも確認した。そして、A 不定詞基本形として現れた動詞には意味的な偏りがなく、どのような動詞でも A 不定詞基本形として現れうることがわかった。

A 不定詞変格形は、主に目的を表す不定詞である。本研究では、目的構文、裁量構文、動詞連合という 3 つの構文に分けて分析した。目的構文の中には、逆接的な意味を持つ例や、比喩的な意味を持つ例も見られた。裁量構文と動詞連合においては、ほぼ固定された表現として用いられることが多かった。さらに、A 不定詞変格形として現れた動詞には、その種類に少し偏りが見られた。これには、A 不定詞変格形が、目的や話者の認識を表すという意味的に制限された構文を形成することが関係していると考えられる。

E 不定詞内格形は、時を表す時相構文を形成する。意味的にある程度の独立性を持つため、不定詞自体の意味が上位動詞に大きく影響を受けることはない。そして、E 不定詞内格形として現れた動詞には、若干偏りが見られた。このことには、E 不定詞内格形が特定の構文を形成することが関係していると考えられる。

E 不定詞具格形は、いわゆる付帯状況を表す。その他に、yllättäen「思いがけなく」のような熟語的な例も多かった。さらに、E 不定詞具格形として現れた動詞は、hymyillä「微笑む」、häpeillä「恥ずかしがる」、leikitellä「軽く扱う」など、人間の感情や態度を表すものが多かった。これには、E 不定詞具格形の意味機能が関係していると考えられる。

MA 不定詞内格形は、上位動詞 olla「ある、いる」と結び付いて進行相的あるいは将然相的な意味をもたらす。また、MA 不定詞内格形として現れた動詞には、意味的な偏りがあまりないということがわかった。その理由としては、MA 不定詞内格形の用法に動詞の意味的な制限があまりないと推察できることがあげられる。

MA 不定詞出格形には、中断や禁止を表す上位動詞と結び付いて構文を形成する例が多い。上位動詞に意味的な偏りがある一方、MA 不定詞出格形として現れた動詞には、意味的な偏りがほとんどなかった。これは、MA 不定詞出格形が上位動詞に大きな影響を受けつつ構文を成していることを意味するものと考えられる。

MA 不定詞入格形は、様々な上位動詞と結び付いて構文を形成する。熟語的な表現も多く存在した。他方、上位動詞とは直接結び付かず、直前の形容詞を補足する例が若干見られた。さらに、MA 不定詞入格形として現れた動詞は多岐に渡り、どのような動詞でも MA 不定詞入格形として現れうることがわかった。

MA 不定詞接格形は、方法や手段を表す不定詞であり、上位動詞に影響を受けることはあまりない。MA 不定詞接格形として現れた動詞の種類には偏りが見られたが、コーパスの内容的な偏りが影響している可能性が高いと考えられる。

MA 不定詞欠格形は、様態や手段の否定を表す。上位動詞と構文を形成する例が多いが、kieltämättä「明らかに」などの熟語的用法も多く見られた。さらに、MA 不定詞欠格形として現れた動詞には、E 不定詞具格形の場合と同じく、人間の感情や態度を表すものが比較的多いことがわかった。

次に、不定詞の生産性についてまとめる。不定詞として現れた動詞の延べ語数や異なり語数を基に、不定詞の生産性（不定詞として現れた動詞の偏り）を算出した。生産性が高かったのは、MA 不定詞入格形、MA 不定詞出格形、A 不定詞基本形であった。他方、生産性が低かったのは、E 不定詞具格形、MA 不定詞欠格形、A 不定詞変格形であった。

生産性の高い不定詞は、不定詞単独では特別な意味機能を持たない傾向がある。例えば、A 不定詞基本形や MA 不定詞入格形は、上位動詞と構文を形成するなどして文中に存在しうる。他方、生産性の低い不定詞は、用法が比較的限られた不定詞である。例えば、E 不定詞具格形や MA 不定詞欠格形は、付帯状況や手段といった意味機能にほぼ限定される。

さらに、不定詞として現れた動詞の頻度を Saukkonen et al. (1979) における動詞頻度と比較した散布図を作成し、動詞頻度の偏りを考察した。その結果、生産性の低い E 不定詞具格形および MA 不定詞欠格形として現れた動詞の頻度と、Saukkonen et al. (1979) における動詞頻度があまり比例していないということがわかった。

続いて、不定詞の動詞性についてまとめる。動詞性の考察においては、不定詞の形態的な特徴を分析した。動詞性の判断基準としては「動詞の文法カテゴリー（ヴォイス）」および「動作主標示」の 2 点を設定した。

動詞の文法カテゴリー（ヴォイス）において、基準を満たしたのは E 不定詞内格形のみである。E 不定詞内格形は、不定詞の中で唯一能動・受動の対立を持つ。しかし、受動形の頻度は、定形動詞における受動形の頻度よりかなり低いことが明らかになった。

動作主標示が可能であるのは、MA 不定詞接格形以外の 8 形式である。このうち、独自の動作主を標示する例が多かったのは、E 不定詞内格形と MA 不定詞出格形である。MA 不定詞入格形、A 不定詞変格形、A 不定詞基本形、MA 不定詞内格形、MA 不定詞欠格形、E 不定詞具格形における動作主標示の頻度は低かった。

以上の考察から、動詞性が高いのは、E 不定詞内格形と MA 不定詞出格形であるという結果が出た。動詞性が最も低いのは MA 不定詞接格形であったが、上記の 3 形式以外は動詞性がほぼ同じであるという結果が出た。

最後に、不定詞の従属度についてまとめる。従属度の考察においては、不定詞の統語的な特徴を分析した。従属度の判断基準としては「上位動詞の項要求」および「不定詞間の従属関係」の

2 点を設定した。

特定の不定詞を項として要求する上位動詞を持つ不定詞は、A 不定詞基本形、MA 不定詞内格形、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、MA 不定詞接格形、MA 不定詞欠格形の 6 形式である。このうち、上位動詞の項要求が見られた頻度が高かったのは、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、A 不定詞基本形、MA 不定詞内格形であった。MA 不定詞接格形と MA 不定詞欠格形において、上位動詞の項要求が見られた例は少なかった。他方、A 不定詞変格形、E 不定詞内格形、E 不定詞具格形は、当該の不定詞を項として要求する上位動詞を持たない。これら 3 形式は、上位節に従属せず、文中に挿入された構造が多く見られた。

一方、他の不定詞に従属することが多かったのは、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、MA 不定詞内格形であった。A 不定詞基本形が他の不定詞に従属する頻度は低く、MA 不定詞接格形と MA 不定詞欠格形が他の不定詞に従属した例は見られなかった。A 不定詞変格形、E 不定詞内格形、E 不定詞具格形は、他の不定詞に従属することがない。

以上の考察から、従属度が高いのは、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、MA 不定詞内格形であるという結果が出た。これらの不定詞は上位動詞と共に構文を成す場合が多いため、このような結果となった。他方、従属度が低いのは、項要求をする動詞を持たない A 不定詞変格形、E 不定詞内格形、E 不定詞具格形であるという結果が出た。A 不定詞基本形は、定形動詞には従属しやすいのに対し、他の不定詞には従属しにくいことが明らかとなった。

さらに、従属度には、生産性との相関があることが明らかになった。従属度が高い不定詞は生産性も高く、反対に従属度が低い不定詞は生産性も低い。不定詞が上位動詞に従属して構文を成す場合、上位動詞には意味的な偏りがあるが、不定詞として現れた動詞の意味には偏りがないという傾向が見られる。したがって、不定詞の生産性が高いという結果になったと考えられる。他方、上位動詞に従属しない不定詞の場合、不定詞として現れた動詞には意味的な偏りが見られる。したがって、不定詞の生産性が低いという結果になったと考えられる。

本研究は、不定詞の使用実態をコーパスデータに基づいて分析・考察したという点に意義があると考えられる。そして、不定詞の動詞性と従属度という概念に注目し、不定詞の生産性の分析とも絡めて考察したことも、従来の研究と一線を画す点である。今後は、フィンランド語だけでなく、ウラル諸語やアルタイ諸語などの他言語における不定詞、さらには分詞や動名詞、副動詞などとの相違点を分析し、それらにおける問題を明らかにしたい。本研究は、今後の通言語的研究にも一石を投じるものになると考える。